

をのやま
小野山は音なしの瀧の山をいふ、むかしは此所にて炭を焼しなり、和歌に詠ず。

拾 遣 深山木を朝な夕なにこりつめて寒さをこふるをの、炭焼 好 忠

続 拾 夕ざれば霧立空に雁鳴て秋風寒し小野の篠原 藻 壁 門 院

りよりつのかは
呂律川〔音なしの瀧川なり、南北に別れて、南を呂川といひ、北を律川となづく。漢土の魚山に瀧川二流あり、呂律川

といふ、其例によるなりとぞ〕鈍捨藪〔呂川の北にあり、大原問答のとき、熊谷蓮生師鈍を袖に隠して法然上人に供す、

れんしやう
蓮生のいはく師もし対論に負給はゞ、法敵を討殺さんとの用意なりと、師これを聞て大に制し給へば、鈍を此ところに

すて置しとなり〕世和井水〔律川の橋をわたりて右のかた石垣のもとにある池をいふ〕井多の清水、おやまのしみづ、

かえてかしは、かつら谷〔何れも所さだかならず、むかしより和歌に詠ず、後考あるべし〕熊谷腰掛石〔律川の橋南の

つめにあり、蓮生法師此所に腰をかけて、法問の勝劣を聴問しけるなり〕